

昭和43年7月1日第5種郵便物認可
平成21年9月5日発行(毎月3日1回発行)
第49巻9月号(通巻602号)

風土



9

百日紅

神蔵器

包丁研ぐ四万六千日の風

たましひとなり涼風を追ひ越せり

生きてゐてカサブランカの今朝ひらく

酷暑かな指に酸素の量計る

書を積みて文字を盾とす西日中

顔一つ掬ふ小町の泉かな
ふたたたびは見ずふるさとの恋螢
かはせみの打つて山梨文学館
何か降る底ぬけ晴れの炎天下
その中の風鈴一つ蛇笏かな
忍性の千服茶臼百日紅
炎天の端はした盲導犬の行く



竹間集

同人作品



赤駒

山路 紀子

緑さす菊紋蒔絵得度台
風薫る細身に光明皇后像
百合の木の花万燈の灯りけり
赤駒の駈けし横山桐の花
銀蘭に風やはらかくありにけり
万葉の横山大山蓮華咲く
赤駒も黒女も遠し揚雲雀

六月の風

岩木 茂

竹間を六月の風流れけり
青がすむ岬や海や朴の花
杉山の幹しらじらと螢の夜
簾垂れ鯖街道の古びゆく
酒蔵の壁に苧泛く梅雨入前
子燕の巢より顔出す登城門
潮騒の一樹にひらく沙羅の花

夏椿

中谷 葉留

時の日のひとりの夕餉ととのふる
自転車を下りて押す坂花ざくろ
郭公や城跡へゆく道標
しばらくを寺へみちづれ夏椿
「一隅を照らす」碑青嵐
郭公や子等一列に学習田
青梅雨や森は言葉をしまひたる

花 茨 小林 輝子

水張つて空を頷けたる棚田かな
朴の花^{つばく} 錆ぶ峯々は雲を被て
どこよりが本当の道花茨
つばくらの二番子村に音のなし
アカシアの花のつつめる鉦山跡
鶴啼くや子規が行脚の峠より
見回りのやうに田に来る青大将

喜怒哀樂 小野寺節子

草刈りの鎌持つ僧の素顔かな
梅雨ぐもり二羽の雀のやんちや振り
真夜中に目覚めペン執り麦茶のむ
七変化照る日曇る日雨を呼ぶ
くちなしの香に足を止め時計見る
喜怒哀樂風にもありや時鳥
裏道に嫁菜の花の咲き初めり

江戸風鈴 小林清之介

街灯が二星を消して味気なや
桜桃忌^{かとう}三鷹の宿のしらふ顔
靴かすめしと見し彼の蜥蜴早やあらず
梅雨明けの半熟卵こつと割り
風鈴のひらめく下げ尾舌^{げう}と呼び
半纏男吹け吹け朱ケの江戸風鈴
夫婦病むどくだみ庭にはびこらせ

さくらんぼ 田村すゝむ

今生を病む掌のさくらんぼ
早苗田の風より低し水の音
早苗籠百俵蔵へ風通す
城跡の一点歩むかたつむり
紫陽花や正座して待つ弓道場
紫陽花の風と旅する星野の絵
いつの間に亡妻も来てゐる蚩狩

南瓜蔓

— 南 うみを —

夏の露消ぬ間の鎌を研ぎにけり
あかときのまづひかりだす茄子かな
鍬打つて朝日に汗をしたたらす
十葉を刈りたる鎌の強く匂ふ
猪の道南瓜畑へまつしぐら
巡礼の跨ぎてゆきぬ南瓜蔓
猿除けの網を繕ふ半夏生
蛇の衣枝に吹かれて父祖の墓
紫蘇の畝森の昏さとなりにけり
先着の蛇に声かく草清水

山河集

同人作品



神蔵 器選

鮎苗の生簀の底に鯨かな
白日傘水無川を渡りけり
魚信きて鮎釣の背のはがねなす
組み終へし茅の輪の屑の濃くにほふ
蚊を打つて夢の半ばをひき返す

浅田 光代

読みかへす魔法の話明易し
カウンターの高きスツールソーダ水
てのひらにつまみのせらるさくらんぼ
児童館のどんがり屋根へ草矢打つ
赤門を入れる乳母車大南風

柿沼 盟子

ふるさとの駅に聴きゐる祭笛
ひらり風ひらり文字揺れ夏のれん
水張つて個々の顔もつ棚田なり

落合 絹代

触れさうで触れぬ江ノ電枇杷熟るる
いきいきと空を奪へり今年竹

豎山 道助

炎天や血を売りし手がコッペ買ふ
夏兆す書架に「コンドラチェフの波」
青野原老師未完の旅に発つ
小便小僧一步前進夏旺ん
噴水の胴切り取れば涼しからむ

根岸 善行

炎日やクレインの爪の下通る
天道虫 鉄の先へ先へ出づ
妻留守の梅雨の晴間を使ひけり
郭公の遠ざかりゆく二度寝かな
苔踏んで花の弾力楽しめり

◇特別作品◇(抄)

山椒魚

池田 達二

青嶺縫ふ赤き機関車玩具めき
夏山をゆくアプト式鉄路かな
梅雨空に声残しゆく夕鴉
梅雨晴れの光を湛ふダムの青
小さき淵山椒魚のひそむらし
眼裏に蜥蜴の綺羅の尾の迅し
烏瓜の花の羞らふ夕明り
山の日を撥ねて一すぢ滴れり
半夏生哀しき伝つた説え残りをり
風鈴のひびきて星を殖やしけり

風土独語／神蔵器



阿波三盆口にはたきて新茶汲む

山本 町子

三盆は結晶の細かい上等の白砂糖。中国から輸入した砂糖（唐三盆）と区別する呼び方で、日本のものを和三盆という。白下糖から糖蜜を抜いてさらす工程を繰り返して作る。私は阿波三盆とは初めて聞いたが、もともと香川・徳島両県は四国和三盆として名高く、阿波の地元の人々は特に阿波三盆と呼び伝承し大切にしていたものであろう。

問題は中七の「口にはたきて」である、私は阿波三盆と言っても茶事に使われるものは、型に入れて打ちぬき干菓子のようになっているものかと思っていたが、この句の三盆はさらさらとした上等の白砂糖そのままのもののようなのである。

客は先ず三盆を懐紙にとつて、静かにいただく。その際、懐紙に三盆（白砂糖）が少し残つていようと、いまいと、客は懐紙を軽く叩くまね、というよりそれらしい所作をする。これは別に作法上決められたことではないが「大変、おいしくいただきました」と亭主への感謝の気持でもあろう。この日の客は、ご近所で親しくしている古老、いささかかっこうをつけて派手に懐紙をはたようにしたので亭主（作者）はおかしかった。思わずほへみ出句が出来たのであろう。

作者町子さんはすでに卒寿を超え、昨年あたりから茶道教授の

現役の場からは引退されたようだが、悠悠自適、利休がいのちに代えても守り通した佗びと数寄に常住する日々「無我」の心を得つつあるようだ。

夫の体四角に雹の中を来る

柴田 久子

雹は今年七月初め頃であつたか、東京でも降つたが、掲出句は日光も少し山よりの別荘での作かと思われる。

つい今し方までよく晴れていた空が急に曇つて、激しい雷鳴がとどろき、大粒の雹が降つて来た。外出中のご主人は傘も持たず、近くに雹をさける家も見当たらない。雹は東京あたりでは見られない大きな白い氷塊で、あたりの木々に激しい音をたて、道路に落ちた雹は弾み飛び跳ねて転んでいる。ご主人はとつさに、上着のボタンを三つ四つはずし、両袖を引いて前に突き出し、背広ですつぽり頭からかぶると、前かがみに腰を折つて走り出した。一方、作者の方は、迎えに行こうと玄関まで出たものの、あまりに雹の降りが激しいのでたじろいでいた。そこへ一頭の熊が四角になつて飛び込んで来た。白昼の珍事である。

切幣を溪に擲つ山開き

根岸 善行

何の説明も要しない句であるが、神官は最後に一と握りの切幣を大きく溪側の天に擲つように力強く撒いた。切幣は麻また紙を細かに切つたもので、米をまぜ合せたりもする。

溪の上空に擲られた切幣は、大きく開き、折から昇る朝日にひらひらと舞い、きらきらと輝きながら落ちて行く。同時に、縄が

切られ、歓声が上り、登山者の第一歩が踏み出される。
山開きたる雲中にこそぞさす

(以下略)

五千石

風土集



神蔵器選

魁の薩摩新茶の届きけり 舞鶴 山本町子

阿波三盆口にはたきて新茶汲む
作務終ふや新茶を盆に檀那寺

腰低き近江の人や花あやめ
雲浜筆選ぶ湖西や朴の花

イトマキエイの水中回転南風吹く 和歌山 池田光子

大仏の掌より蚊柱たちにけり
点眼のまなこの上の立葵

てのひらの蛩を母のてのひらに
亡き母の来てゐる水を打ちにけり
葛餅や町の古地図の包装紙 東京 柴田久子

夫の体四角に雹の中を来る
青空の芯が的なり草矢打つ

少年の父を追ひ越す草矢かな
時の日や時計なき腕のびやかに

切幣を溪へ擲つ山開き 上尾 根岸善行

一人づつ来て大勢の夏櫂
夕刊も手紙も届き走り梅雨

生りそめしばかり雹に打たれけり
閑古鳥一直線に晴れにけり
インク壺乾く机上や走り梅雨 川崎 桐島教子

万緑山境内裏に神輿倉
青梅雨や口中熱きジャスミン茶

言伝を差し込む戸口枇杷熟るる
火を当てて曲げる青竹雲の峰

あの世まで泳いで行つてしまひけり
雹降るを見る幼子の眼となりて
草矢射るとき光りけり屋の星 川崎 豎山道助

六月の湖畔へ揃ふ靴二つ
乾盃やカチと音して雲の峰